

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

イチゴ炭疽病の注意報について（送付）
このことについて、平成15年度病虫害発生予察注意報第1号を発表しましたので送付します。

注意報

平成15年度発生予察注意報第1号

平成15年6月2日

熊本県病虫害防除所長

農作物名 イチゴ
病虫害名 炭疽病

1 予報内容

- (1) 発生地域 県下全域
- (2) 発生時期 5月以降
- (3) 発生程度 平年比 やや多

2 注意報発令の根拠

- (1) 本病については、平成15年4月30日に技術情報を発表し注意を喚起していたが、5月中・下旬に行った主要産地17ほ場の親株床調査では、8ほ場で*Colletotrichum acutatum*菌による葉枯れ炭疽の発生がみられ、発病株率が4.1%（前年値4.7%、平年値2.8%）と平年よりやや多く、多発生した前年に近い発生状況であった。
- (2) 5月23日福岡管区気象台発表の1ヵ月予報によると、気温は高く、降水量は平年並と予想されており、炭疽病の発病適温が25～30℃で、雨滴などで病気が広がっていくことから、これから梅雨期にはいり降雨が続くと病気が急激に蔓延する恐れがある。

3 防除上注意すべき事項

- (1) 親株床、育苗床での雨よけ栽培は本病の発病抑制に効果が高い。特に、地床での鉢受け育苗は、挿し苗育苗より多発生となる恐れがあるので、鉢受け育苗では雨よけ栽培を行う。
- (2) 親株床、育苗床は排水に留意する。育苗床は本病が発生していないほ場を選び、全面マルチや高設育苗を行い、降雨や灌水時の泥水の跳ね返りを防止する。
- (3) 発病していない親株より採苗する。鉢受け育苗では、苗が活着後はすぐにランナーを切除し、親株を取り除く。また、発病株は伝染源となるため、速やかに処分し、ほ場に放置しない。
- (4) 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去して通風採光を良くする。
- (5) 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので防除を徹底する。
- (6) 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、薬剤の系統を替えてのローテーション使用を行う。

イチゴ炭疽病に登録のある農薬（熊本県病虫害防除基準より抜粋）

薬剤の系統等	商品名	使用濃度 (倍)	使用基準		注意事項
			使用時期 (収穫前日数)	使用回数	
グアニジン系	ベルケート水和剤	1,000	育苗期／5回以内		浸透性展着剤は混用しない。高温多湿時薬害
ストロビリン系	アミスター20フロアブル	2,000	苗床：前日まで／4回以内 本圃：前日まで／3回以内		
有機硫黄剤	アントラコール顆粒水和剤	500	仮植栽培期／6回以内		アルカリ性薬剤との混用はさける。 高温多湿時、軟弱苗等薬害。アルカリ性薬剤との混用はさける。
	ジマンダゲン水和剤	600	仮植栽培期但し収穫76日前まで／6回以内		
有機銅剤	キノトーフロアブル	500～800	育苗期／3回以内		水和硫黄剤、ジネブ剤との混用はさける。
微生物剤	バイオラスト水和剤	1,000～2,000	育苗期～前日まで／－		果実の汚れ。
その他	オツイト水和剤80	800	30日まで／2回以内		高温時、軟弱等薬害
その他	デランフロアブル	1,000	育苗期／2回以内		

注意：この一覧表は、系統別、収穫前使用日数（短い順）、商品名（アルファベット順）に掲載。

◎農薬は適正に使用しましょう！

- ・農薬は農薬取締法によって使用できる農作物の種類、適用病虫害、希釈倍率、収穫前日数、総使用回数などが定められています。ラベル等をよく読んで正しく使用するようにしましょう。
- ・現在農薬登録のないものや、使用する農作物に適用のないものは絶対に使用してはいけません。